

<週報No.2, 875> 2, 986 回例会

2019年3月29日(金)

■会長/古屋 了 ■幹事/加藤 明博

◆司会=川村総一郎 副SAA

◆ゲストビジター=本日はいらっしゃいません

◆出席報告

本 日	76.2%	10名欠席
前回訂正	86.7%	6名欠席

◆ラッキーナンバー=No.30 古屋了君

◆ニコニコボックス=●古屋了君、加藤明博君=本日

は、野口会員の卓話です。宜しく申し上げます。●瀬在昭男君=本日の例会が最後になります。皆様、大変お世話になりました。●飯田兼光君=瀬在さんロータリー活動をご一緒させて頂きありがとうございました。長野でのご活躍お祈りしています。お体大切に!!●早出由男君=結婚記念日のお花を頂き有難うございました。結婚して52年目を迎えました。夫婦共に元気で有難いです。●石田孝一君=野口さん宜しくお祝い致します。●山本實君=野口様卓話宜しく申し上げます。●古屋了君=ラッキーナンバーに当て。

◆会長告知・古屋了会長=加藤幹事の厚生労働大臣表彰授賞祝賀会は先週末、県内の和洋中の料理に関わる皆さんが発起人となって盛大に開催されました。新聞報道にもありましたように、加藤社長の「家族をはじめ、私ほど人に恵まれた人間はいない。今思うと師匠吉澤親父の指導は鬼のようだったが、支えて下さったすべての皆様に感謝し、後進を育成することでその恩に報いたい」という感謝と決意のご挨拶を受け、後輩の代表として結びの挨拶に立った布半宮崎料理長の「二人の鬼師匠を受け継いで」との言葉に、鬼に例えられた吉澤・加藤両師匠が顔を見合わせて苦笑しあう姿は、会場の共感を呼びました。岩波会頭のご挨拶では「藤原正男さんの培った伝統」とのお言葉に、本久の加藤会長さんが頷いておられたのも印象的でした。改めて、おめでとうございました。話は藤原正男さんに戻ります。

藤原さんの実績に「ニムラ舞踊賞」の設立があります。舞踊家ニムラエイイチは藤原さんのご近所に生まれ、家業の没落をきっかけに東京からアメリカへ雄飛し、稀代

のサムライダンサーとして戦前から戦後にかけて欧米の舞踊界で活躍。カーネギーホールにスタジオと住居を持ち、後進の育成に情熱を傾けました。娘の和世さんによると、藤原さんは父上の松次さんから、渡米した幼馴染がいることを聞かされており、いつか会えると予感。昭和40年頃には交流が始まっていたそうです。ニムラは三協精機など諏訪の製造業者のアメリカ進出を助けたり、フランキー堺や長谷川一夫等芸能人のブロードウェイへの口利きをしたりする中で、自身の財産を基金として日本の舞踊界の振興のため舞踊賞を創り、授賞式の都度墓参をしてもらえるような仕組みを構想していたようですが、それを託す適任者には恵まれませんでした。彼はその頃渡米した藤原さんの誠実さに全幅の信頼を置いて寄付金を託しました。舞踊界に知己のなかった藤原さんも獅子奮迅の尽力。これが現在市民や企業の協力を得て継続している「ニムラ舞踊賞」です。ニムラは帰国することなくニューヨークのブディストチャーチに葬られましたが、その遺骨は1980年リサン・ケイ夫人に抱かれて帰国。今は頼岳寺境内にご夫妻で眠っておられます。今年度は生誕120周年を記念する「ニムラ・イヤー」でした。ニムラ舞踊賞の発表会が昨年11月文化センターで開催され、ニムラの記録映像と受賞者によるダンスの公演。ニムラの自伝とニューヨークへの資料収集の旅の記録が出版されました。本日回覧させていただきます。実行委員としてこの事業の核を為したのは3人の藤原イズムの継承者、山田勝文氏、松井澄寿さんの娘婿松井宏次氏、英語講師の矢島恵氏。藤原さんがリードしたまち懇、国際交流協会のメンバーです。

◆幹事報告・加藤明博幹事=①15日の例会でIMのデスクッションに参加して頂いた会員の方の名前を間違えてしまいました。参加して頂いた会員は高橋さんです。申し訳ありませんでした。②私事ですが、24日の祝賀会には大勢の会員の方にご出席をして頂き誠に有難うございました。③4月の例会予定ですが、4月5日はプログラム委員会による新入会員の卓話です。12日クラブフォーラムは会員増強委員会の担当となり、18日は諏訪湖ロータリークラブとの合同お花見例会で、会場は布半となりますが、ガバナー補佐も訪問されるので、多くの方の参加をお願いします。又案内をFAXします。19日の例会は18日の振り替え休日となります。26日のクラブフォーラムはロータリー情報委員会の担当

となります。

◆**瀬在昭男会員退会のごあいさつ**＝この度、人事異動で来週4月1日から私の地元である長野市で営業関係の仕事をするようになりました。

諏訪ロータリークラブの仲間に入れて頂いて、まだ、たったの1年半しかたっておりませんが非常に有意義な楽しい日々でございました。皆様には助けて頂くばかりで何も返すことができていませんがこれからも長野で頑張りたいと思います。本当にありがとうございます。



◆**新入会員卓話・野口洋介会員**＝私は2002年入社で、大手鉄道会社向けの営業を6年、持ち株会社人事部にて人事戦略立案の仕事をして3年、本体人事部での新卒採用を6年、そして2017年10月より諏訪支社で諏訪圏6市町村の営業をしています。

家族は妻、4歳の息子、11歳のパピヨンです。生まれは神奈川県、育ちは九州の福岡・佐賀で、妹2人の3人兄弟の長男です。父母は山好きで山で知り合っており、高校までは毎年家族で北アルプスを縦走していました。上の妹の名前は「梓」と言い、正に上高地を流れる梓川から取った名前です。また、私自身、妻とは軽井沢で結婚式を挙げており、縁ゆかりある長野の地で働けることにとても喜びを感じています。



本日は当社の歴史や仕事についてお話しします。

損害保険は「守り」の印象があるかもしれませんが、実は挑戦の歴史であり、「挑戦」は139年間ずっと当社のキーワードであり続けてきました。

1869年に日本は開国し、海上交易により成長しようという機運にありました。一方、貿易に使う船は堅牢ではなく、裏では大きな開運リスクを抱えていました。国益の

ためにはこの海運リスクをヘッジする必要があり、立ち上がったのが資本主義の父・渋沢栄一でした。彼は「利益でなく国益のために」という想いで、三菱グループ創業の父である岩崎弥太郎の出資を受けて設立しました。当社は、日本で初の保険会社として生まれ、その後日本初の本格的株式会社になりました。岩崎弥太郎の出資も得ていることから、当社は三菱グループに属しています。

貿易、モータリゼーション、宇宙開発、インターネット進展など、あらゆる産業の挑戦に関わってきました。リタールの裏にあるリスクを洗い出し、評価し、対処する、という「リスクコンサルティング」を通じて世の中の挑戦実現をサポートする役割を担ってきました。このことから、私たちの損害保険業界は金融ではなく「インフラ」とも言われることがあります。

いくつかの事例を通じて当社の仕事をお伝えしましたが、一番お伝えしたいのは、「いざというときに困った企業や人々にとって頼りになる存在であること」が私たちの最も重要な使命でありミッションだということです。新たな挑戦という「いざ」にも、万が一の事故といった「いざ」の時も。

3.11の東日本の大地震発生後、鉄道や道路などのインフラ設備はもちろん復旧していない震災翌日から、全国各地・部門関係なく被災地に向けて多くの社員を派遣しました。最終的には延べ2,200名の社員が被災地に入り、被災地の方々の安否確認、物資の供給などの支援を行いました。これは、私たちができること、やるべきことだという強い想いで取り組んだことです。つまり、ボランティアではなく当社の使命・役割としての取り組みでした。

綺麗ごとには聞こえるかもしれませんが、「いざ」という時に世界から必要とされる存在であり続けたい、という想い。これは、渋沢栄一の「国益のために」のDNAは時代が変わってもなお生き続けている証左であり、現在はグローバルグループとして「To Be a Good Company」という全世界共通のコーポレートスローガンとなって私たちに受け継がれています。

◆今後の例会日程

4月5日	金	クラブフォーラム（プログラム委員会）
4月12日	金	クラブフォーラム（会員増強特別委員会）
4月18日	木	諏訪湖RC合同花見例会、ガバナー補佐訪問
4月19日	金	休日

執筆担当 小口泰幸